

難民 REFUGEES

1999年第2号（通巻114号）



破壊の先に
希望は見えるか？

1999年：バルカン半島の行方



UNHCR

国際連合
難民高等弁務官
事務所

ねらわれる援助職員たち

1998年のクリスマス直前。誘拐され、ロシア連邦チェチェン共和国内にとらわれていたUNHCR職員のバンサン・コシテルが、317日ぶりに解放された。事件の全貌は後ほど紹介するが、その体験談は援助職員の安全が世界中で一段と脅かされている現状を物語っている。

1998年は危険がピークに達した。任務中に殺された国連職員は22人(軍務関係者をのぞく)、さらにスイス航空111便の墜落で5人が命を落とし、8人が誘拐された(後に解放)。過去7年間で殺された国連職員は160人にのぼるが、このうち適切な捜査がなされた事件は1割

か。UNHCRなどの人道機関は、これまでも危機の周辺で活動してきた。しかしいまでは、法や秩序など存在しないも同然の紛争地帯の最前線での活動が増えている。こうした場所の中心にいるのは、反政府運動家とテロリストと武力組織などの混成部隊で、国際人道法や被災者を助けにきた援助職員の存在など知らないか気にもとめない。

皮肉にも、公平な援助が不公平感と同じくらい大きな危険要因になる場合がある。どんなに純粋な援助でも、一方の側の人々を助ければ、もう一方を敵にまわしかねない。人道機関は旧ユーゴスラビアとルワンダでの残虐行為を裁く国際刑事裁判所を支持しているが、これにはマイナス面もある。戦争犯罪の容疑者たちは、目撃者とみられる人々つまり援助職員を標的にしかねないのだ。

援助職員が脅威にさらされる原因はほかにもある。コソボやアンゴラなど地雷が大量に埋まった場所での活動や、衛星通信技術の発達だ。ヨーロッパや北米でなされる紛争地帯の状況説明や批判、非難は、世界の最果ての地にも即座に伝わる。するとフィールド職員をスパイと考える兵士たちが、すぐさま行動を起こすのである。

人道活動は、国際社会の危機対応策でも重要な要素となり、政治的行動の代わりにもされるようになってきた。こうした状況を、コフィ・アナン国連事務総長は、人道活動が、紛争の原因に対処する政治的意思がないことを隠す「かくれみの」にされすぎていると、批判した。援助職員たちが活動しているのは、各国が、相当な訓練と装備と厚い保護を受けた平和維持部隊の派遣さえ「危険すぎる」とその足を踏む場所なのだ。

人道行動は、足並みのばらつきがちな各国が最低限合意できる事項である場合が多い。しかし善良な行為への危険が高まっているいま、人道活動のもっとも根本的な部分が脅威にさらされているとっていいだろう。



治安訓練を受ける
UNHCR職員

にも満たず、法の裁きを受けた者はひとりもない。非政府援助機関(NGO)でも、同じような犠牲が出ている。

こうした状況は、人道援助機関の職員が政情不安地域への赴任を拒否するか、強い影響力をもつ国がしかるべき対応をみせないかぎり続くだろう。現在のところ、各国政府とメディアのいずれも人道援助職員の安全問題に大きな注意を払っていない。

例を示そう。1994年に制定された「国際連合要員及び関連要員の安全に関する条約」が、施行に必要な22か国の批准をやっと獲得したのは99年1月15日のこと(22番目の批准国はニュージーランド)。国連は人道職員に治安訓練を受けさせるため信託基金を設立したが、わずかでも資金を拠出した国は三つしかない。

なぜ援助職員の安全が、これほど脅かされているの



編集者：Ray Wilkinson
 寄稿者：Ariane Quentier, Wendy Rappeport,
 Andrej Mahecic, Judith Kumin,
 Kris Janowski,
 Maki Shinohara, Jelena Novikov,
 Paul Stromberg
 編集アシスタント：Virginia Zekrya
 写真部：Anneliese Hollmann,
 Anne Kellner
 デザイン：WB Associés - Paris
 制作：Françoise Peyroux
 総務：Anne-Marie Le Galliard
 配本・発送：John O'Connor, Frédéric Tissot
 地図・衛星画像：UNHCR - Mapping Unit

日本版
 翻訳協力：藤原 朝子、佐藤 綾子
 編集・総務：日本・韓国地域事務所 広報室

『難民Refugees』誌は、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）ジュネーブ本部・広報部と東京にある地域事務所が発行する季刊誌です。寄稿記事に表わされた意見は、かならずしもUNHCRの見解を示すものではありません。また図示された国境の表示は、各領土およびその政府当局の法的立場に対するUNHCRの見解を表明してはおりません。

掲載記事の編集権はUNHCRにあります。掲載記事・写真のうち、著作権表示のないものの転載・複写には許可が要りません。また表示のない写真は、事前に承諾を求めた出版の目的に限り使用を認めます。

本誌の日本語版制作協力：(株)イソラコミュニケーションズ(東京)、英語版および仏語版制作協力：ATAR sa(スイス)。本誌の発行部数は、英語、仏語、ドイツ語、イタリア語、日本語、スペイン語、アラビア語、ロシア語、中国語の各国語版を合わせ20万6000部。

発行：UNHCR日本・韓国地域事務所
 〒107-0052 東京都港区赤坂
 8-4-14

TEL 03-3475-1615
 FAX 03-3475-1647
 ホームページ
<http://www.unhcr.or.jp>

郵便振替 口座番号
 : 00130-4-59734
 加入者名：UNHCR
 業務時間：月曜～金曜日
 9:30～17:30
 (昼休み12:30～13:30)
 日本語版発行：1999年6月

表紙：破壊と炎上（1996年、サラエボ近郊の町グルバニツツァ）
 UNHCR / L. SENIGALLIESI

右上：10か月ぶりに解放され、モスクワに到着したバンサン・コシェテル。
 ASSOCIATED PRESS/APTN/KEYSTONE

UNHCR ジュネーブ本部
 P.O. Box 2500
 1211 Geneva 2, Switzerland
www.unhcr.ch

難民 REFUGEES

1999年 第2号（通巻114号）

2 編集部から

世界中で高まる援助職員たちへの危険。

4 特集

帰還を待つおびただしい数の人々と、残されたわずかな時間。

レイ・ウィルキンソン

スレブレニツァ：「キリング・フィールド」を再訪した援助職員。

ルイス・ジャンティル

年表：旧ユーゴスラビア崩壊の動き

モスタル：モスタルの過去と現在。

カーステン・ヤング

女性：ボスニア女性の自立を支援。

町長：孤独な戦いを続ける

セルビア系町長。

16 バルカン半島情勢

地図でみる1990年代のバルカン半島

18 Quote Unquote

19 地雷

ボスニアに残る地雷原と政治の落とし穴

20 クロアチア

今年こそ難民たちは帰還できるのか？

22 ユーゴスラビア

「忘れられた」難民たち

ポーラ・ゲディニ

24 コソボ

戦闘の中のコソボ日記

フェルナンド・デル・ムンド

26 Short Takes

世界からの短信

28 インタビュー

バンサン・コシェテルに聞く

レイ・ウィルキンソン

30 People and Places

31 記録資料



4 復興にはげむボスニアで、UNHCRの住居プロジェクトもすすめられている(サラエボ近郊)



22 クライナ地方奪還をめざすクロアチア軍の「嵐作戦」により、追い立てられるセルビア人たち。避難民は推定17万人に。



24 不安定な状況がつづくコソボ自治州のアルバニア系住民の少年(ウロセバツ)



ブルチコ(ボスニア)近郊
でも復興作業が進む。

未来を決定づける年

いまでも数え切れないほどの人々が帰郷を待っているが、ボスニアに残された時間はわずかだ。

レイ・ウィルキンソン

大虐殺の血痕は、地下室や階段の冷たいコンクリートの床に染みついて永久に消えない。1993年4月のクロアチア人によるアフミチ村(ボスニア中部)襲撃事件を思い出したイスラム系住民のアムラ(仮名・43歳)が、取り乱して虐殺の証拠を指さした。銃をもったクロアチア兵(なかには何世代も前から近所に住んでいた者もいた)は、夜明けとともに丘の上の村を襲った。アムラはいそいで近くの森に逃げ込んだ。

1時間におよんだ虐殺の死者は、老人、障害者、子どもを含め100人以上。いちばん若い犠牲者は生後3か月の赤ん坊で、生きたままオープンで焼かれた。最高齢の犠牲者は96歳。アムラの家でも9人が無残に殺され、死体が焼かれた。この襲撃はイギリス軍によって明るみに出され、テレビで報じられ、世界中を震え上がらせた。アフミチ村はすぐさま旧ユーゴスラビア紛争で最悪の残虐事件がおきた場所として有名になった。

現在、アフミチ村は再び注目を集めている。同村をはじめとする数百の地域では、戦前のコミュニティを再生させる実験が行なわれている。その成功いかんで、ボスニア・ヘルツェゴビナで異なる民族グループ同士が平和を築いていけるかどうかが決まりそうだ。

アフミチ村と最寄りの都市ビテズの周辺地域は、戦前はイスラム系住民(ムスリム人)が圧倒的多数だったが、少数派とはいえ相当数のクロアチア系住民も暮らしていた。戦闘が激しさを増し、セルビア系、クロアチア系、イスラム系の住民が、それぞれ民族的に「純粋な」場所を作ろうとしはじめると、殺りくの嵐 ▶

▶ が吹き荒れた。このため現在のビテズ地域は、人口の大半がクロアチア系となり、ムスリム人は少数派になってしまった。

人口構成の逆転と、対立が再燃したときの危険を承知のうえで、1999年初め、アムラをはじめとするムスリム人150人は故郷に帰ってきた。UNHCRなどの国際機関は、村人たちが帰ってきやすいように家屋の修復を支援。新しい屋根や窓、調理用コンロを支給した。

「とにかく生きていられて幸せです」。アムラは事件を思い出すにつれ、涙が止まらなくなった。「義父は体が不自由で逃げられませんでした。幼い13人の娘もここで殺されました。心の傷をいやすのは、とても難しいでしょうね。」

ムスリム人の帰還を歓迎するため、ちょうどクロアチア系の当局職員が来ていた。クロアチア系住民は現在も丘のすそ野に暮らしているが、ふたつの村の住民が言葉を交わすことはない。クロアチア兵に爆破され、ガレキの山と化したモスクが目を引き。「赤ん坊だって、ここで起きたことを忘れないだろうよ」とフアド老人は言う。

新たなスタート

旧ユーゴスラビアは、第二次大戦後に生まれた共産主義国のなかでも一番進歩的とされ、世界の非同盟運動の創立メンバーでもあった。しかし民族間の関係が悪化し、1991年にクロアチアとスロベニアが独立を宣言すると分裂が進行。セルビアとクロアチアの間で戦争がおき、92年にボスニア・ヘルツェゴビナも独立を宣言すると、戦火はこの国にも拡大した。

このため約300万人が故郷を逃れ、70万人がヨーロッパをはじめとする地域で難民となり、残された人々も旧連邦内で国内避難民となった。UNHCRは、ピーク時には350万人の戦災者(難民、国内避難民など)を援助し、小麦粉、塩、衛生品から毛布、コンロ、たきぎ、多目的ビニールシートまであらゆる物資を支給した。UNHCRのチャーター機は空前の人道空

(8ページにつづく)



スレブレニツァの虐殺事件から1年後、「行方不明者」一人ひとりの名前を縫いつけた布が掲示された(ツズラ)。

「死んでしまうのだと誰もが思っていました...」

包囲下にあったスレブレニツァで援助活動をつづけたルイス・ジャンティルが、悪夢のような思い出に立ち向かうべく、5年ぶりにこの地を訪れた。

1998年のクリスマスまであと4日。私たちはボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボ郊外にある丘をのぼり、スレブレニツァをみざしている。外はまだ暗い。

もう逃げられない。まもなく第二次大戦以来ヨーロッパで最悪の犯罪が起きた場所に到着する。1993年、私がこの世の地獄を見た場所、国際社会がきっと虐殺

をやめさせてくれるだろう、と愚直にも信じた場所に。

あれから5年。しかし私はいまだに、ここで見たことも、以来そこで起きたことも受け入れられずにいる。

目的地に近づくほど不安がつのってきた。この2～3週間、真夜中に冷や汗をかいては目を覚ましたものだ。

私はスレブレニツァから持ち帰った古



UNHCR / H.J. DAVIES

ぼけたノートを読み返した。4月14日の書き出しはこうだ。「スレブレニツァではひどい光景をたくさん見てきたが、……4月12日ほど恐ろしい出来事はなかった。14:15頃、明らかに市民をめぐらして砲弾の雨が降ってきた。」

「ちぎれた人の体や肉片が学校の校庭のフェンスにぶら下がり、グラウンドには文字通り血の池ができた。人の体が、それらしき形をとどめているものが二台の荷車に積み、病院に運ばれていくのがみえた。死者56人、ケガ人は約100人。」

不可能だった旅が3時間で

戦時中は不可能だったが、いまは3時間もあればサラエボから来られる。私は

初めてスレブレニツァに来たときのことを思い返した。表通りは、手を振ったり投げキスをおくる人々や、満面の笑顔で「ありがとう」と叫ぶ子どもたちであふれていた。もともと人口8000人だった町は、ボスニア東部の民族浄化を逃れた4万人のイスラム教徒であふれていた。

重火器で武装したセルビア人勢力に包囲され、なんとか逃げ出さなければ死んでしまう、と誰もが思っていた。しかし国連安全保障理事会によって「安全地帯」と指定され、スレブレニツァのパニックは吹き飛んだ。国連保護軍のカナダ人将校が、われわれの部隊には市民を守る倫理的な義務があるが、新たな攻撃にさらされたら守れるかどうか自信がない、と言ったのを思い出す。

1993年にスレブレニツァにいた人は、現在ひとりも残っていない。「安全地帯」がボスニア内セルビア人勢力の攻撃によって陥落した1995年7月、全員が追放されたか虐殺されたのだ。

現在の住民の大部分は、サラエボなどから移住してきたセルビア人で、町は少数の「地元有力者が運営している。国際職員によれば、ムスリム人が帰還する可能性はゼロ。経済状況も悲惨だ。

私は雨の中、町じゅうを歩いた。1993年4月12日、サッカーをしていた子どもたちが殺された校庭の前も通った。言葉が出てこなかった。カフェ171という店では、地元の若者たちが、仕事がないから町を出て行きたいと言っている。

本当に聞きたかった質問を、誰にも聞けなかった。「95年の虐殺に手を貸したのは誰だ？ 死亡者を確認して、母親たち、娘たち、妻たちの悲しみを癒してやれる者はいないのか？ この血塗られた、呪われた土地になぜ住めるんだ？」

かすかな望み

マリニコ・セクリツは、戦前、ラジオ・スレブレニツァに27年間勤めていたセルビア系ジャーナリスト。両親と兄弟は昨年ここに帰ってきた。昔ながらの住民

のなかには、ムスリム人の帰還を待っている人もいる、という彼の言葉に私はかすかな希望を感じた。しかしそう言う人の大部分は老人で、現在、町を支配しているのは脅しを武器にする連中だ。

あの秋の晩、父親と夫は森に逃げ、私は赤ん坊をきつく抱いて過ごした。と言うのはミルゾダという若い女性だ。以来、父親と夫の行方はわからない。

彼女は私たちに、拘禁者を調べてほしいと言う。生きのびた多くの人々は、行方不明の夫たちが、まだ生きてどこかに拘禁されていると願っているのだ。

行方不明の7396人は、おそらく死亡しているだろう。身元がわかった49人の遺体は家族に返された。集団墓地では遺体の確認作業がつづいているが、「人権のための医師団(PHR)」によれば、身元が判明する人はごくわずかとみられる。

かつて住んでいた郵便局の建物で掃除婦をしていた女性を見つけた。共通の友人の消息を聞いてみたが、「一度も姿を見ません」と言う。別の女性は、「良いものはすべてあの日の1時間で姿を消しました。息子も、夫も、兄弟も、家も」と語った。

家族に何が起きたのかちゃんと知っている人もいる。しかし彼らの質問に、私は返す言葉がない。「1000人かそれ以上が処刑された第1日目に、なぜ殺人を止められなかったのですか？ 93年に私たちを守ってくれたのなら、なぜ最後まで守ってくれなかったのです？ あのととき私たちを見捨てていたら、おそらく数千人が命を落としていたでしょう。でも95年ほどの犠牲者は出なかったはずです。」

私はスレブレニツァを再訪できたことに感謝している。しかしそこを立ち去れたことにもっと感謝している。ホテルの部屋でひとりになると、私は亡くなった人々、そして戻ることのない愛する人を待ちつづける人々のために泣いた。■

▶ 輪作戦を展開し、包囲状態にあったボスニアの首都サラエボが、3回の冬を乗り切るのを助けた。

しかし民族浄化はあらゆる場所でおきた。死者はボスニアだけでも20万人(多くは一般市民)といわれ、工場、橋、道路、水道、発電所などの経済基盤も破壊された。ヨーロッパでは、過去50年で最悪の紛争となった。そこにやっと終止符が打たれたのは、ボスニア・ヘルツェゴビナのイゼトベコビッチ大統領、セルビアのミロシェビッチ大統領、クロアチアのツジマン大統領が、アメリカのライト・パターソン空軍基地で Dayton 和平合意に署名した1995年11月21日のこと。このときまでに国内の家屋の60%、学校の50%、病院の30%が、破壊または大きな打撃を受けた。

Dayton 和平合意は、新たなスタートの第一歩になるはずだった。セルビアは、

奪った領土の一部を手放し、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国内に国土の49%を占める「スルプスカ共和国」*を樹立。残り51%の地域は、それより先に樹立され

「少数派」の支援は、
現在ボスニアが直面する
もっとも複雑な問題だ。

たムスリム人とクロアチア人勢力の「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦」*の領土となった。両構成地域とも(すくなくとも建前上)多民族からなるサラエボの中央政府の下におかれた。軍は撤退し、北大西洋条約機構(NATO)をはじめとする国際部隊3万人以上が平和を監視しにきた。96~99年に実施された51億ドル規

模の国際復興計画は、破壊されたインフラの少なくとも一部を再建する助けになった。総選挙と地方選挙がこの3年で実施され、今後も多数予定されている。起訴された戦争犯罪人は、国連戦争犯罪法廷で裁かれるべくハーグに送られた。

しかしこの地域全体に平和が根づくかどうかは、紛争で故郷を失った数百万人の帰還と再定着にかかっている。96年以来、ボスニアに帰還した難民は31万人、避難民は25万人にのぼる。

だが1999年1月現在、いまだに帰郷のときを待つボスニア難民は40万人、避難民は80万人いる。

こうした数字は事態の一部を物語っているにすぎない。98年は帰還の年と宣言されたが、実際に帰還したのは10万人で、当局の目標の半分に過ぎなかった。もっと懸念される傾向は、異なる民族グル

* 訳注：いずれも、「ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国」という単一国家の枠内につくられた構成体で、「国」とは異なる。

戦争の代償：グラダツァツ地方（ボスニア）の破壊された家々（1996年）。



JUNICER / A. HOLLMANN

ープが支配する土地に帰還した人(難民と国内避難民)が、98年の場合3万人しかないことだ。いまま帰還を待つ120万人の大部分は、このグループに属すると考えられている。

これら「少数派」の支援は、現在ボスニアが直面するもっとも複雑でむずかしい問題だ。さらに国内経済の悪化、他の地域の混乱、根強い過激派の反対運動、硬直的な官僚システムとがあいまって、事態の改善を妨げている。

少数派帰還の年

それでも1999年を少数派帰還の年と位置づけ、12万人の帰還を目標とする国際職員もいる。しかし98年の実績が目標の4分の1にとどまったことから、すでに99年の目標達成を疑問視する声もある。

「98年は非常に残念でした。99年も同じような年にはなりません」と、あるUNHCRのフィールド職員は言う。

98年12月に開かれた多国間平和履行協議会(ボスニアの政治・経済の再建を事実上監視する機関)でも、帰還問題の緊急性が確認され、経済改革、政府機関の強化、独立司法機関と多民族警察組織の創設とならんで、難民の継続的帰還をうながす2年計画が承認された。

また、超民族主義者の勢力拡大を防ぐために、ボスニア担当高等弁務官カルロス・ウェステンドープの権限が強化された。会議では、「ボスニア・ヘルツェゴビナでは、永続的な平和が根を張りはじめている」との指摘がなされる一方、次のような発言もあった。「やるべきことは、まだ山ほどある。……国際支援による基盤がなければ、(ボスニアは)崩壊するだろう。」

難民と国内避難民の帰還は、国際社会、地域、そして現地の連携にかかっている。どこかひとつの結びつきが崩れれば、全体のプロセスが崩壊しかねない。

世界の他の地域とくらべると、ボスニアは最大規模の援助を受けている。しかし大部分の地域、とくにセルビアの支配下にある地域では、水も電気も住居もな

ユーゴ紛争の主な動き

1991年6月25日

クロアチアとセルビアが、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国(旧ユーゴ)から独立を宣言。すぐに戦争がはじまり、旧ユーゴ軍の支援を受けたセルビア人反政府勢力がクロアチア領の30%を制圧。

1991年10月8日

旧ユーゴがUNHCRの援助を要請。2週間後、国連事務総長がUNHCRを旧ユーゴ危機における中心的人道機関に指定。

1992年1月2日

サラエボ協定が結ばれ、クロアチアでの戦闘に初の停戦が成立。

1992年1月15日

ヨーロッパ共同体(EC)、クロアチアとスロベニアの独立を承認。

1992年2月21日

国連安全保障理事会、国連保護軍(UNPROFOR)のクロアチア配備を決議。その後ボスニアにも配備。

1992年3月3日

ボスニア・ヘルツェゴビナが独立宣言。セルビア系勢力が首都サラエボを包囲し、領土の70%を制圧。

1992年7月3日

UNHCRのサラエボ人道空輸作戦がスタート。戦闘がピークを迎える以後2年間、UNHCRなどの機関は旧ユーゴ全土で350万人を援助。難民は推定70万人、国内避難民は200万人に。

1993年1月11日

和平協定のパンス=オーエン案がジュネーブで協議される。

1993年2月27日

包囲地帯に救援物資を運ぶため、空中投下作戦がはじまる。

1993年5月6日

国連安全保障理事会が、サラエボ、ツズラ、ゼパ、ゴラジュデ、ピハチ、スレブレニツァを「安全地帯」に指定。しかし戦闘状態は変わらず。

1995年7月11日

セルビア人勢力の攻撃でスレブレニツァが陥落。一回の虐殺で数千人が殺されるという、ヨーロッパでは第二次大戦以来最悪の大量虐殺事件が起きる。

1995年8月12日

クロアチアが「嵐作戦」を展開。クライナ地方をセルビア人反政府組織から奪回。セルビア人17万人が避難。

1995年11月21日

対立に終止符を打ち、難民の帰還をめざす Dayton 和平合意が調印される。1か月後、NATO主導の平和実施部隊(IFOR)が配備される。

1996年1月9日

3年半にわたりサラエボに食糧を届けてきた人道空輸作戦が終了。

1996年9月14日

ボスニア・ヘルツェゴビナの戦後初の選挙で、戦時中の強硬派指導者たちが改めて実権を握り、難民の迅速な帰還に影を落とす。

1998年1月15日

戦争初期に旧ユーゴ軍に奪取された東スラボニアが、国連東スラボニア暫定統治機構(UNTAES)の引き上げにともないクロアチアの統治下に復帰。

1998年3月

新ユーゴスラビア連邦(新ユーゴ)コソボ自治州で、アルバニア系分離主義者と新ユーゴ軍の間で戦闘がはじまる。新たな避難民が生まれ、9月までに35万人が国内外に避難。

1998年10月27日

新ユーゴのミロシェビッチ大統領が、NATOの軍事圧力に屈して、停戦と新ユーゴ軍および治安部隊のコソボ撤退に合意。欧州安全保障協力機構(OSCE)が合意を監視するため、2000人の監視団の第一陣を送りこむ。

1999年2月23日

コソボ自治権拡大についての暫定合意が、仏パリ郊外のランブイエで成立。

い。前述の平和履行協議会は、ボスニア政府に次のように通告している。支援は無限に続くものではなく、近い将来、外

国政府ではなく多国籍企業の投資意欲をそそるほどに国家経済が回復しないかぎり、これら地域には立ち入れず、難民の ▶



UNHCR / J. SENIGALLIESI

サラエボで4年ぶりに再会し抱き合う女性たち(1996年)

▶ 帰還はすすまないだろう。

地域政治と軍の動向も、難民の流れを直撃する。コソボ紛争で、ボスニアをはじめとする地域には新たな難民の波が押し寄せ、ボスニア難民自身の帰還を妨げる可能性がある。ユーゴスラビア連邦政府、クロアチア政府、あるいはボスニア政府の決断は、地域全体にドミノ効果をもたらしかねない。たとえば国家や地方政府が民族的少数派の帰還を妨害すると、報復として別の地域で異なる民族グループ出身の難民の移動が阻止される。住居不足もバルカン半島全体の問題だ。ある地域に避難場所がないと、他の場所での帰還が遅れてしまう。

不可能な任務

しかし状況は、すでに根本的な部分で複雑をきわめている。ボスニア人口400万人の大部分が、長年の隣人たちによってもたらされた家族や親戚の死、家や職場、生活全般の崩壊などで、いまま精神

的に深く病んでいる。医師や専門家によれば、きわめて不安定な現在や未来を受け入れる努力は、戦争そのものを経験するより困難な場合が多い。

少数派の帰還のために活動しているフォルカー・ターク上級保護官によると、UNHCRは現在も、民族浄化の先頭にたった張本人たちと交渉しなければならない。これら超民族主義者たちも、 Dayton 和平合意には

(口先では)同意した。しかもウェストドープ高等弁務官には、厄介な連中を排除する権限がある。それでも帰還プロセスは、一段と巧妙な手段で妨害されるようになってきた。

「彼らの武器はもはや銃ではなく、官僚的形式主義です」とタークは言う「独自のルールと特色をもつ13種類の憲法と13種類の司法制度に私たちは対処しなければ

なりません。しかもサラエボの中央政府から末端の地方自治体にいたるまで、なにかと手続きを遅らせたり、余計なことをさせたり、ぶち壊しにしようとする。官僚主義は、ゲリラ戦より効果的だ。」

政治的な策略に効果がないとわかると、民族主義者たちは恐怖政治を復活させ

「彼らの武器はもはや銃ではなく、官僚的形式主義です。官僚主義のほうが、ゲリラ戦よりずっと効果があるのです。」

る。帰還民は、自宅で殺されたり、暴行されたり、脅され、周囲の家屋を爆破されたりする。

ボスニア連邦とスルブスカ共和国で、ムスリム人、クロアチア系、セルビア系の各コミュニティを訪問すると、少数派支援のむずかしさがはっきり分かる。

ゴディニャは、戦前は週末になるとサラエボ市民が訪れる美しい保養地だっ

(12ページにつづく)



モスタルの東部と西部を結ぶ橋は、いかにも頼りない(1994年)

© E. DAGNINO

「家に帰ったら命があぶないかもしれない」

カーستن・ヤングは、ボスニアの町モスタルが包囲された最悪の時期、UNHCR保護官として活動していた。そして現在平和はどう受け入れられているかみるため、モスタルを再訪した。

モスタル。1993年8月：町の東部は、腐ってゆく死体の悪臭、排泄物とゴミの臭いでむせかえるようだ。

民族浄化の嵐が吹き荒れている。覆面したクロアチア系民兵が、真夜中にムスリム人とセルビア系住民をベッドから引きずり出す。男たちは拘禁キャンプに連れて行かれ、消息を絶つ場合もある。

女たちの多くはレイプされ、クロアチア系住民が制圧したネトパ川の西岸から、ムスリム人の支配する東岸に追い出された。生き残った人たちは爆撃のなかローソクを灯して地下室に身を寄せ合い、ドイツ、フランス、どこでもいいから安全な場所に逃げたいと切望している。

無数の難民と拘禁キャンプ、破壊された病院、メチャクチャにされた教会、なぎ倒されたイスラム教寺院の尖塔、墓地にされた公園の光景が、早回しの映画のようによみがえる。

私たち外国人職員にとって、当時モスタルは宇宙の中心だった。残虐で意味のない戦争の被災者を助けるのが唯一の使命だったが、ジェノサイド(大量虐殺)が再びヨーロッパで野放しにされている現実には納得がいかなかった。

モスタルを再訪して、当時の背筋の凍るような恐怖がよみがえった。空港は無法地帯と化し、町に入るには最前線のロケット弾や狙撃兵の射撃をいくぐるしかなかった。

以前とちがう光景

いまでは地雷や鉄条網、検問、物乞いする子どもたちの姿はない。表通りの「狙撃兵に注意」という看板は選挙の掲示板に変わり、砲弾が落ちた跡は埋められ、建物も再建された。ベネトンの店ができ、犬を散歩させる人がいて、水も電気もある。

橋が修復され、自由な往来もできる。し

かしこれは偽りの「正常」だ。

Dayton 和平合意が結ばれ、地元当局も和解を約束し、NATO軍が配備されたにもかかわらず、あの暗黒の日々に追放された人たちはいまでも自宅に帰れない。

なぜなのか？ 表面的にはきわめて「正常な」町の、歩いて5分で行ける川の向こう岸に帰る権利を、なぜ人々は主張しないのだろうか。

それはボスニア全土でみられるジレンマでもある。そこにはまだ、頭の古い政治家や殺し屋がいるのだ。彼ら自身も避難民で、空き家を占拠している。彼らは、ボスニアのほかの地域にある自分の家に帰れないかぎり、モスタルから動かないだろう。

こうした状況下では、自宅に帰ることが身の危険になる可能性がある。

ムスリム人のあるグループは、1か月ほど前にモスタルの南にある村に帰還した。その夜、窓から手榴弾が投げ込まれ、男性ひとりが命を落とし、ひとりがケガをした。電気も水もなく、彼らの家は徹底的に略奪されていた。平和なのに、窓はUNHCRのビニールシートで覆われた。

命乞い

モスタルを去るとき、もっと多くの人を助けられなかったことに大きな罪悪感を感じた。人々は毎日、自分が「次の番」になる前に逃げるのを助けてくれと頼んできた。出来るかぎりの努力はしたが、十分ということは決してありえなかった。

数か月前に、定住先のヨーロッパから戻ってきたという男性に会った。故郷の町では「少数派」の帰還民になってしまったし、自宅はいまも半壊状態で、隣人たちは敵意をあらわにするという。それでも彼は、ヨーロッパでの「安全な」年月よりも幸せだという。

なぜって？ それは故郷にいるからだ。モスタルの人たち全員が、いつか自宅に帰れるようになってほしい。それが私の願いである。 ■

▶ た。ここでUNHCRなどの機関は、帰還への呼び水として22家屋を一戸約800ドルで再建した(ボスニア全土で、UNHCRは推定3万戸の家族用住宅を修復した)。

セリファ・リンドフは、夫、息子、義理の娘、そして他のムスリム人の5家族と帰ってきた。村はスルブスカ共和国とボスニア連邦の境界を画する分離地帯(ZOS)のごく近く。それなのに多くの家はからっぽか、週末にしか使われていない。「以前は学校や診療所が隣にありましたが、いまは2時間も歩かなければなりません」とセリファは言う。

家は何か月も前に修復されたが、電気の供給が再開されたのはごく最近のこと。製材所といくつかの工場も数年前に焼き払われたままだから、働き口もない。セリファの家族は、親戚が送ってくれる食糧でなんとか暮らしている。

公共の交通機関はないから、ムスリム人たちが外の世界へ行くには、豪雪のなかセルビア人の町トルノボを経由しなければならない。ゴディニヤとトルノボの間には、破壊された元ムスリム人の村トゥロピがある。UNHCRは約2年間、トゥロピへの少数派帰還をすすめるため、トルノボのセルビア人市長とねばり強く交渉してきた。ムスリム人の家20戸を再建するのと引き換えに、セルビア人の家20戸と学校ひとつ、製材所の再建も提案した。

変更される交渉の焦点

しかし問題は次々と出てくる。最初はその家から再建すべきかをめぐって、次はスタッフの数をめぐって、という具合だ。やがてトゥロピ出身のムスリム人難民自身も、不満を言いはじめた。彼らの家を元通り再建するには多額の費用がかかるため、UNHCRが安価なプレハブ家屋の建設を提案したところ、難民たちに拒否されたのである。製材所も閉鎖されたままで、トゥロピは見捨てられた瓦礫の村だ。話し合いは現在も続いている。

1997年にUNHCRがはじめた「オープン・シティ」プロジェクトは、国際的に幅



UNHCR / A. HOLLMANN
NGO「イスラミック・リリーフ・ワールドワイド」が作った戦災者のための歩行補助器具(サラエボ)。

広い評価を得た。仕組みは簡単。少数派の帰還と和解をすすめた町や自治体は、国際支援を受けられるというものだ。しかしいまのところ、この計画のもとで帰還した少数派は1万5000人しかいない。

サラエボ郊外のボゴスツァ市は、当局による帰還計画の実施が遅すぎるという理由で、「オープン・シティ」の認定を取り消された。

スルブスカ共和国の首都バニャルカの周辺地域は、戦争中、最悪の民族浄化を経験した。セルビア軍の要塞と約80キロ西にある連邦の町サンスキモスト間の回廊地帯では、当時の恐怖と多民族国家再建のジレンマが鮮明にみられる。

戦前のバニャルカには、ムスリム人とクロアチア系住民が推定6万人いたが、現在は1000人にも満た

ない。街は物理的ダメージをまぬがれたが、モスクだけはみな爆破された。

コザラツツ村の風景は、必要以上に激しい爆撃を受けた第二次大戦時代の写真をみるようだ。ほぼ全家屋が破壊され、ゴースタウンの廃墟は野生の木々に飲みこまれようとしている。戦前は、比較的裕福なムスリム人4000人が住んでいた。UNHCRとノルウェー難民委員会は、帰還を促すため家屋53戸を復旧。これまでに5世帯が帰還している。

そのなかにベシッチとズムラ・オスマンもいた。1992年の民族浄化事件で、彼

らはセルビア人兵士に10分で家を出て行くよう命じられた。待っていたバスになんとか乗りこんだときに見た村は、ムスリム人のオスマン一家が生まれ育った、心地よい、並木の美しい村だった。

UNHCRは、監視的
性格の濃い保護計画に
重点を置いている。

その2週間後、村はメチャクチャにされてしまった。

「自分の家を見たときは、ショックで薬が必要でした」と、ズムラ(65歳)は昨年12月に帰還したときのことを語った。「われを忘れて泣き叫びました。私の全人生が否定された気分でした」。オスマン一家は、着替えが詰まったスーツケースと、ヤカンひとつ、調理用コンロをもって帰ってきた。ひと部屋で生活し、床で眠り、パンとチーズを食べている。水はない。セルビア当局は、電気の供給再開に25ドル相当の支払いを求めているが、

今年じゅうに

少数派帰還を急がなければ、
「もうチャンスはないかもしれない。」

夫婦は一銭ももっていないため、石油ランプふたつを電気がわりにしている。

「帰ってきた当初は、夜も寝ないで耳をすまし、不安におびえていました」とズムラ。「近所の家が爆破されたりしました。でももう怖くありません。もしまた彼らがやってきたら、私は殺されるだけ

です」。帰還民たちは、国際軍のチェコ軍兵士が近くにいること、そして連邦との「国境」つまり「安全」が数キロ先にあることから安心を得ている。

オスマン家から何本か道をへだてた場所に、いわゆる集合センター(この場合、学校だった建物)があり、現在、連邦の領土となった地域出身のセルビア系住民150人が暮らしている。ここに来て3年になる彼らは、戦争でもっとも辛い経験をした被災者に数えられる 年老いて体も弱まり、心に傷を負い、親戚もいない場合が多く、独立した支援手段もなく、▶

戦災女性を助ける

一連の小規模プロジェクトで生活再建を支援

「戦時中の子どもたちは、多くを望まないものでした。服だって、赤十字が支給する誰かのお下がり喜んでものです」とある若いボスニア女性は言う。「いまは、アディダスやナイキの最新の靴を欲しがらる」。サラエボ市街にある「紛争解決センター」で最近開かれた集会でのことだ。別の女性はこう付け加えた。「いまの子どもたちは、あまりにも成長が速く、あまりにも早く年老いています。学校は退屈で無意味。大人は何もしてやれません。」

身体の傷は治ってきた。しかし兵士や難民、国内避難民、サラエボ包囲の生存者、「ふつうの」村人にいたる人口400万人が心に受けた傷は日増しに深くなっている。専門家によれば、紛争で受けた心の傷を癒やすには、長い年月がかかるという。UNHCRは昨年、主にアメリカが拠出した360万ドルを女性向けのプロジェクト約220件に割り当てた。

プロジェクトは地元機関が企画したもので、全体として「ボスニア女性イニシアチブ」と呼ばれる。それぞれは小規模で、個人生活に直接効果があるように作られ

ている。女性たちが技能を学び、仕事を見つけ、心の傷をいやすのを助け、法的支援をすることで自立を促すのだ。

サラエボ紛争センターの女性たちは、多くが避難民で、「コリドー(回廊)」と呼ばれる地元グループの定期集会に出席していた。彼女たちは編み物をならい、個人的な問題や欲求不満を話し合う。

ボゴスカ自治区では、スレブレニツァから来た若い母親と6歳の息子が国の福祉手当てを得るため、弁護士の手助けを求めている。

夫は、スレブレニツァ陥落以来、消息が分からない。最近ドイツから帰還して以来、彼女は母親と息子の3人で月70ドル相当の給付金で生活してきた。「息子の『ここにいられるの? それともまた引っ越すの?』という質問に答えられません」と彼

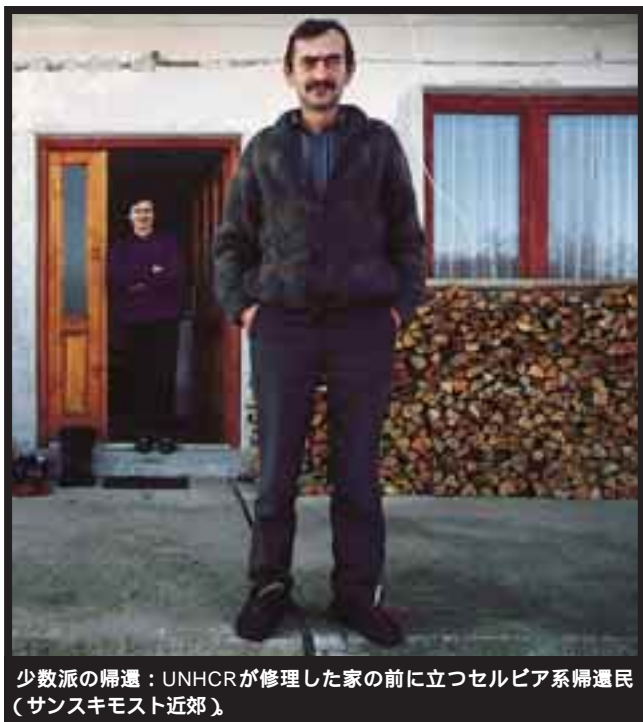
女は言う。「もう疲れ果てました。」

別の会合では、医師や社会福祉職員、カウンセラーが、グループ・セラピーをしている。患者のなかには月12ドルで子どもを育てている独身女性や、レイプされた娘を連れて父親がいる。「彼らの感情を取り戻したい」とあるカウンセラー。しかし若い女性患者は言う。「もう自尊心なんてありません。失った自尊心を取り戻すお金もありません。」

「国はまだ精神的に不安定な状況にある」と言うのは、民生委員のラギブ・バツナガだ。「本当の問題は、これから表面化してくるでしょう。とくに若者のあいだでね」。ボスニアにとって、それが本当に長期的な不安材料である。■

地元NGO「ボスニアにおける女性のための女性組織」が主催するインテリア・デザインの授業。





少数派の帰還：UNHCRが修理した家の前に立つセルビア系帰還民（サンスキモスト近郊）

▶ 故郷に帰る見込みも欲もほとんどない。セルビア当局は、彼らの苦難を交渉材料に国際支援を求めている。スルプスカ共和国政府のピーター・ジョダン難民担当副大臣は、こう問いかける。「こんなときに、どうしてムスリム人5万人の帰還を受け入れられるでしょう。セルビア系難民はどこへ行けばいいというんです？ どこで暮らせばいいんですか」。しかし少数派の帰還を遅らせる目的で、当局がわざと集合センターを開放しているのでは、という疑念も広まっている。

も、こうした少数派の帰還を認めるべく努力しているというが、そのスピードはイラつくほど遅い。UNHCR職員ビシュヌ・バンドリによると、1998年はいくつかのプロジェクトへの資金到着が遅れたため、多数の人々の帰還に影響が出たという。そして今年スピードをあげなければ、少数派の大規模帰還を支援する「チャンス私たちは逃してしまうでしょう」と語った。こうしている間にも、サンスキモストでは犯罪、ヤミ市、アルコール中毒、児童売

構成地域の境界を越えた場所では、サンスキモストが帰還の重要地点になりつつある。このかつて何の特色もなかった田舎町で、現在スルプスカ共和国の領土となっている場所に住んでいたムスリム人のチャンスを待っている。多くは自発的に、あるいは人道職員が「しむけられた」帰還と呼ぶプロセスでドイツから帰還してきた。両構成地域当局と

春が急増している。貧しい難民たちは、裕福なく（主にドイツからの）帰還民によって賃借りしていた家を追いだたられつつある。「人々は希望をたずさえて帰ってきます」とバンドリ。「ドイツでは、何もかも良くなったと聞かされてきたのです。けれども何も変わっていません。だからすぐに、欲求不満が高まっていくのです。」
バンドリらフィールド職員は、少数派の帰還についてほかにも厄介な問題に気がついている。帰還した人のほとんどが老人なのである。老人のほうが操るのが簡単だし、やがて死に絶える、と一部の地元当局者が考えた結果だ。
「若者は決して帰ってきません」とズムラ・オスマンは言う。「私の二人の息子も、町で新しい暮らしをしています。家族が別れて、ひとりか二人が故郷に帰り、他の家族は戦時中の収容場所に残る。こうすればその家族は国際援助を受ける資格を失わずにすむ。しかし彼らが「一時的な」住居から出て行かないために、反対側からの少数派の帰還は妨げられてしまう。日中に自宅を訪問して、夜になると「安全な」多数派地域に帰ってくる「一日旅行者」もいる。ずっと住んでいると人道職員に思いこませるため、夜間も電気をつけっぱなしにする帰還民もいる。裕福な難民たちは、サラエボなどの都市の居住許可証をさっさと購入する。
実際、ボスニア・ヘルツェゴビナ全体の社会構造は、戦争以来逆転してしまった。



ドルバル町長のミレ・マルチェッタ

ボスニアのドンキホーテ

意欲まんまんの町長が夢をかかげて大奮闘。

数か月前、ひとりのクロアチア系住民が、セルビア系の町長ミレ・マルチェッタの執務室に押し入った。彼は町長を外に引きずり出すと、こん棒や灰皿、レンガでなぐりつけた。

町長は舌をだらりとたらし、死んだフリをしたところを、救援にきたカナダ軍の手で病院に運ばれ命拾った。しかし数週間後、町長はドンキホーテばりの運動を再開した。ボスニア西部の町ドルバルに以前住んでいたセルビア人

たちに帰還を促すこの運動は、強硬派民族主義者の反感を買い、一部の国際職員の賞賛を集めた。
かっぶくのよい白髪混じりの元セールスマン、マルチェッタは、英雄にはほど遠い風貌だ。1995年、クロアチア系とムスリム人の両勢力の兵隊が、マルチェッタらセルビア系住民数千人をドルバルから追い出した。しかし97年、難民にも戦前住んでいた自治体への選挙権が認められた地方選挙で、マルチェッタは町長に当選。

戦前は人口の推定61%が地方に住んでいた。現在は同じ割合が都市部に暮らしており、その少なくとも一部は村の暮らしに戻りたくないと考えているようだ。現地のある研究によると、ボスニア避難民の35%が、田舎の家を売って新しい場所に引っ越したいと考えている。

UNHCRは、1998年は8700万ドルだった活動予算を、99年には6400万ドルに縮小。多くのプロジェクトに新たな方向づけをした。家屋再建などの住居プロジェクト向け資金も3000万ドルから900万ドルに大幅カットした。これは緊急再建計画から段階的に撤退する、UNHCRの決意を示している（現在他の機関への引き継ぎがすすんでいる）。そして帰還地域での保護官による「家庭訪問」や監視パトロールの増加、裁判制度、警察、人道機関の監督や強化などの監視的保護といった、UNHCRの「中核的」プロジェクトに、より重点を置かれるようになった。

計画担当の上級職員キリアン・クラインシュミットによると、UNHCRの「民族領土間」バス運行計画も見直される予定だ。これは本来、民族地域を往来する無料の交通機関を提供し、民族グループ間のカベを崩すために考案されたが、今後はボスニア内部だけでなく、クロアチアやユーゴスラビアにも行くバスにしたいという。 Dayton 和平合意以来、バ

「若者たちは決して帰ってきません。」



地元NGO「友達になろう」でタイプの授業を受けるサラエボ女性たち（1998年）

スは年間推定80万人以上を運んできた。多くのフィールド職員は、いまや時間との戦いだと確信している。ボスニアにおけるUNHCRの活動を指揮するバリー・リグビーは、「今年は決定的な年になる。（少数派の帰還に大きなインパクトを与える）最後のチャンスかもしれない」と言う。ヨーロッパ諸国のなかには、少数派を帰還させるより「移住させる」ほうが好ましいと明言する国もでてきた。難民たちをボスニアに帰すよりも、多数派の民族地域への「移住」を奨励しているのだ。

こうした対応には、たしかにメリットがある。実権を握る地元政府が、少数派の帰還を願っておらず、場合によっては帰還を阻むべく暴力に訴えるような現状では、そこに多数の人を帰還させるよりずっと簡単なのだ。

しかしこれを認めれば、民族浄化された小国家を設立する、という民族主義者たちの戦争の本来の目的を支持することになる、と批判派は主張する。著名な「国際危機グループ(ICG)」によれば、ボスニアの平和はいまだ砂上の楼閣であり、安易な答えは見つかりそうにない。■

すぐに夢の実現にとりかかった。

戦前のドゥルバルは、人口の97%をセルビア系が占めたが、現在はクロアチア系民族主義者の支配下にある。他方、スルブスカ共和国のほうでも、民族の「純粋性」が希薄になるのを嫌がる強硬派の当局者たちが、セルビア系住民の帰還奨励には消極的だ。

98年初め、クロアチア系民族主義者たちは脅迫活動を開始。眠っていた老人二人をベッドで殺害し、セルビア系住民の家

屋多数に放火したほか、国連の建物も攻撃した。マルチェッタが標的にされたのもこの頃だ。

マルチェッタのやり方は手荒すぎで、押し付けがましく、個人的な夢に執着しすぎだ、という声は国際職員の中にもある。彼は頑固で、外の世界にも批判的だ。「ここに安全はまったくない。住む場所もない。こんなのはDayton 和平合意とは呼べない。それでも彼は、できるだけ援助が必要なことは認める。「われわれは牛や

ニワトリ、小さな養魚池が欲しい。援助が生活再建のカギだ。」

少数派の帰還は、依然として戦後のボスニアでもっともやっかいな問題だ。マルチェッタは、深い亀裂が根強く残っているのを認める。

しかし「私の息のあるうちは、戦いつづける。われわれ(セルビア系)は、もう決して逃げ出さない」。マルチェッタは、ボスニアで奮闘して何かを変えるのに成功した数少ない人のひとりなのである。■

バルカン半島情勢

UNHCRは旧ユーゴスラビア紛争のピーク時、350万人を支援した。

紛争の死者はボスニアだけで25万人という報道も。「民族浄化」という言葉が日常的に使われるようになった。



ドイツ

クロアチア



1 クロアチアとスロベニアが、1991年6月にユーゴスラビア社会主義連邦共和国から独立を宣言。その直後に戦争がおきた。クロアチアの町ブコバルは、戦闘の発生当初もっとも激しい戦闘の舞台となった。セルビア軍の数か月にわたる爆撃で、ドナウ川沿いの町は変わり果てた姿となり、「民族浄化」という言葉が新たな戦争用語として使われるようになった。

クロアチア



2 ボスニア・ヘルツェゴビナが、1992年3月に独立を宣言。するとこの地域にも戦闘が飛び火して、おびたしい数の人々が故郷を追われた。海岸の町リエカのサッカー競技場には、ヨーロッパとしては第二次大戦後初めてテントのキャンプが設置され、子どもたちを収容した。

スイス

スロベニア

リュブリャナ

ザグレブ

2

5

1

クロアチア

ボスニア・ヘルツェゴビナ

6

10

7

3

サラエボ

8

モンテネグロ

ボスニア



10 住宅、産業、生活基盤の再建が、今後の安定のカギだ。しかしデイトン合意から3年が経過した今、各地は荒廃したまま。スルプスカ共和国内の町コザラツにも、ボスニアの数家族が戻ったが、再建と帰還は遅々として進んでいない。

コソボ



9 旧ユーゴ各地の戦闘は収束したが、新ユーゴスラビア連邦のコソボ自治州では、1998年全般を通じて政府軍と治安部隊がコソボ解放軍(KLA)と衝突した。数十万人が避難したほか、多数の死者も出た。国際的な停戦検証団も送りこまれたが、1999年初めには新たな混乱がおき、ラチャク村では住民数十人の虐殺死体が発見された。

モスタル



8 選挙の実施を規定したのも、デイトン和平合意の大きな特徴だ。以後、ボスニアの町モスタルなどで各地で総選挙や地方選挙が実施され、今後も多くが予定されている。

ローマ

ドイツ

サラエボ空輸作戦は、1992年7月から96年1月までと、ベルリン空輸をはるかにしのぐ長期間に及んだ。これによりサラエボは3度の冬を乗り切った。

1999年初めの時点で、ボスニアへの帰還を待つ難民と避難民はいまだ120万人いる。

デイトン和平合意以来、51億ドル規模の復興計画がボスニアの再建を助けてきたが、まだ広大な地域で援助は不足している。



ボスニア



3 ボスニアの首都サラエボが包囲されたのを受け、1992年7月、UNHCRは食糧を届けるべく人道空輸作戦を開始。この種の空輸作戦としては空前の長期間におよび、サラエボ市民の暮らしを3年間助けた後、1996年1月に終了した。

ジュネーブ



4 旧ユーゴスラビアの紛争を食い止めるため、定期的な協議が開かれた。緒方貞子・国連難民高等弁務官も1993年末、大虐殺をやめさせ、350万人に援助を行きわたらせるため、ボスニアの指導者たちと話し合った。

ボスニア



5 1995年8月、クロアチア軍はクライナ地方をセルビア人反政府勢力の手から奪い返すため、「嵐作戦」を開始。セルビア人約20万人が同地方を追われ、多くはボスニア国内のセルビア人支配地域を経由して、セルビア共和国に脱出した。

デイトン



7 度重なる交渉の末、米オハイオ州の空軍基地ですべての関係当事者がデイトン和平合意に署名。この合意は反目に終止符を打ち、難民と国内避難民がボスニアに帰還するための環境を整えた。1か月後には、NATO主導の平和維持部隊も配備され、デイトン合意は、現在の再建・復興を支える基盤となった。

ツズラ



6 包囲されたボスニアの町スレブレニツァは、国連の安全地帯に指定されたにもかかわらず、1995年7月、セルビア人勢力の攻撃によって陥落。数万人(多くは女性、子ども、老人たち)が追放されたが、若い男性など数千人は、第二次大戦後ヨーロッパでおきた最悪の虐殺事件の犠牲となった。



「私のために誰かが命を賭けてくれたのなんて、生まれて初めてです。」

バンサン・コシテルUNHCR 現地事務所長(チェチェンに誘拐されてから317日ぶりに解放されて)

「手を頭の後ろに組んで、雪の上に寝かされ、殴られました。それから丘をのぼるよう命じられ、パニックを起こして逃げ出そうとした者には、治安部隊が発砲しました。撃ち殺された人もいましたし、倒れたところを殺された人もいました。」

コソボ自治州のラチャク村でおきた虐殺の生存者

「ボスニアでは、誰でもやっていたことだ.....セルビア系住民も、クロアチア系住民も、誰もが。民族浄化は彼らの特技なんだ。」

ユーゴスラビア連邦のミロシェビッチ大統領(ボスニア国内のセルビア系住民にかわって、ボスニアの民族浄化を助けているとの批判に答えて)

「ボスニア・ヘルツェゴビナでは、永続的な平和が根づきはじめています。しかしやるべき仕事はまだたくさんある。」

ボスニア情勢をモニタリングしている多国間平和実施協議会の声明

「われわれの主要抛出国で、難民受け入れの誇り高い歴史を持つ国が、史上もっとも厳しい制限措置をとっている。」

デニス・マクナマラUNHCR 国際保護局長(米国の庇護手続きを批判して)

「あれほど強い意思と目的意識があったのに、アンゴラ和平プロセスは崩壊し、アンゴラはいまや戦争状態にある。」

コフィ・アナン国連事務総長(アンゴラにおける紛争再開について両陣営を非難して)

「5回目に斧が私の手に振り下ろされたとき、気を失いました。幼い娘の叫び声でやっと気がつきました。彼らは娘の手も切り落としたのです。」

シエラレオネ出身の女性(反政府軍が日常的に行なっている残虐行為について語って)

「自分の問題を解決するには、スケープゴートをさがすのはやめて、自分自身を見直すべきだ.....救いの手は大陸の外からくるだろうという.....幻想もやめるべきだ。」

サリム・サリム アフリカ統一機構(OAU)事務総長(難民問題に関するパンアフリカ会議で)

そこは地雷原だった

目に見えない爆発物と政治的思惑に
ほんろうされる住民たち。

1992年、最悪の戦闘がサラエボ国際空港ちかくで展開されるなか、ベゴ・メミセビッチは自宅の周囲に地雷を埋めた。やがてそこにセルビア兵が侵攻してきた。

4年後、帰還したベゴは、自宅の被害を調べていて地雷を踏み、右足を吹き飛ばされてしまった。「自分で埋めた地雷でした」と、彼は皮肉な笑いを浮かべる。「どこに埋めたか忘れてしまったんです。」

地雷は戦時中、兵士と市民の区別なく何千人もの命を奪い、手足をもぎとった。そして戦後も、故郷を失った人々の再定住や弱体化した経済の再建を妨げる大きな原因となっている。

ボスニア全土には推定3万か所の地雷原があり、現在も100万個の爆発物が埋まっているとされる。大部分は紛争の前線だった所に埋まっており、UNHCRの対地雷活動担当技術アドバイザー、ティム・ホーナーによると、約60%の位置はデータベースに把握されているという。

「しかし他の地雷の位置は誰にも分かりません」とホーナーは言う。サラエボだけでも、最大の繁華街をふくめ1400か所の地雷原がある。かつて「狙撃通り」と呼ばれたサラエボの目抜き通りには、いまや路面電車とタクシーが行きかっているが、専門家たちは念入りに旧市街のチト一軍事兵舎の敷地をさらっている。

地雷による犠牲者は毎月10人。これでも毎月100人だった数年前よりは減ったほうだ。ホーナーは、最重要地域の地雷撤去は「5年後には解決できるだろう」と言うが、もっと範囲を広げると「二世帯」の年月がかかるという声もある。

難民と避難民の帰還を促進するため、UNHCRは1999年、地雷活動センター(MAC)が組織した約40人からなる地雷

撤去グループ6つに250万ドルを提供した。これは、最終的には地元団体と非政府組織(NGO)に引き継ぐ考えた。

ボスニアの地雷撤去は、やりきれないほど単調で時間がかかり、とにかく危険だ。

1997年は計6.8平方キロの地雷が撤去されたが、代償は大きかった。この年死亡した地雷撤去作業員は11人。1998年10月には、二人のUNHCR作業員も、ヤイチェ(ボスニア)で命を落とした。専門家によれば、地雷撤去には時間がかかりすぎるため、慎重な作業員たちの集中力を維持するのがむずかしい。たった1秒でも、足を滑らせたら命を落とす危険があるのだ。

政治的な問題も影響している。地方自治体の当局者たちは、たくさんの地雷が埋まっているから定住には適さないと主張して、「少数派」の帰還を妨害しようとする。ボスニア駐留のNATO軍は、高度な地雷撤去装置をもっているが、軍としての活動範囲をめぐる微妙な思惑が大規模な支援を妨げてきた。

ベゴ・メミセビッチの人生は、悲しい皮肉に満ちている。彼が地雷を踏んだのは、ボスニア軍を除隊して数か月後のこと。事故当時に軍人だったら、毎月300



戦後サラエボの自宅にもどったベゴ・メミセビッチは、かつて自分が埋めた地雷を踏んで右足を失った。



地雷原とみられる土地を掘りかえすドイツ製の地雷破壊機(サラエボ空港)。

ドイツマルク相当の給付金をもらえたはずだ。しかし除隊したベゴは、毎月38ドイツマルク相当しかもらえない。しかもこの唯一の収入の3分の2は、義足の調整に取られてしまう。

それでも彼は、自分は「ラッキーな」被災者だと言う。UNHCRの援助で自宅の一部を建て直し、妻子と一緒に暮らしているのだ。「私の身の上起きたことは、神のご意志だ」と彼は言う。「しかし少なくとも、私はまだ生きている。」■

「帰ってきた故郷は 別世界のようだった...」

スタートは遅れたが、今年はクロアチアへの帰還民も増えそうだ。

戦争の最初の兆しは、小さな密告のサインだった。クロアチア人のベラ・クルリャッツは、セルビア系の隣人が、近所づきあいや通勤途中に「おはよう」と挨拶しなくなったのを憶えている。

次にセルビア系住民たちは、子どもを遠くにやった。その直後に銃撃戦がはじまり、迫撃砲が雨のように降ってきた。ベラと二人の息子たちは運がよかった。赤十字の助けを受け、故郷を逃れてクロアチアの海岸まで行けたのだ。夫のイビツァ・クルリャッツはセルビア系兵に捕まった。

ベラとイビツァは、ドナウ川沿いの豊かな平野にある中心都市ブコバルで生まれ育った。この地方は決して戦争と無縁だったわけではなく、何世紀にもわたり、その支配権をめぐるハンガリー人、ドイツ人、オーストリア人、オスマントルコが争ってきた。

クロアチアでは、1991年に旧ユーゴスラビアから独立宣言をした直後から戦闘がおき、ブコバルはセルビア系が構成員の大多数を占めるユーゴスラビア人民軍の最初の標的になった。3か月間にわたる徹底的な砲撃で、町は完全に破壊された。クロアチア人4万人の大部分は、何週間も地下室に身をひそめていた。なかには殺された人もいたし、大勢がケガをした。生存者の大部分は銃を突きつけられて追いつ出された。

「私は砲撃のまったなかで、屋根の瓦の取り替えを命じられました」とイビツァは、捕虜時代を振り返る。「路上の死体も集めました」。夜になると、彼は地下

室に閉じ込められ、繰り返し暴行を受けた。「外に連れ出されて拷問され、殺された人もいます。悲鳴や銃声が聞こえました。」「証拠」を消す任務につけられた捕虜たちも、「抹消」されたという。

別世界のような故郷に帰って
イビツァは妻と家族に再会して、1998年6月に一家でブコバルに帰ってきた。そし

占拠されていた。彼らの多くも、ボスニアをはじめ自分たちが歓迎されない地域からきた戦争の犠牲者だった。クルリャッツ一家の家も、ブコバル出身のセルビ

「民族浄化」は
戦争を語る言葉として
すっかり定着した。



ブコバルの自宅で台所に立つ帰還民のベラ・クルリャッツ。

UNHCR / A. HOLLMANN

ア系住民に占拠されていて、立ち退きを拒否された。「所有者が帰ってきて、占拠者に他に行く場所がない場合は、すぐに追い出してはならない、という決まりがあるのです」とベラは言う。

結局、セルビア系住民は法的に立ち退かされた。避難民として正式登録されていなかったのだ。しかしクルリャッツ一家は、最後にひとつ侮辱を味わった。ある日、そのセルビア系の家族が家具の大部分をもっていったのだ。一家は庭に立って、その様子を見守っていた。しかし立ち退きそのものが中止されるのを恐れて、とめようとはしなかった。

多くの人はもっと運が悪かった。1995年以降、故郷に帰還した難民と国内避難民は約8万人。このうちボスニアとユーゴスラビアからの帰還民は約3万5000人だが、いまだにボスニアには約4万人、ユーゴスラビアには約30万人の難民がいる。セルビア系クロアチア人難民の多くは、1995年の大空襲「嵐作戦」でクライナ地方(クロアチア)から追いつ立てられてきた人々で、現在もクロアチア政府に集団帰還を妨害されている。

て多くの避難民 クロアチア人だけでなく旧ユーゴスラビア全土の避難民が戦後直面した、別世界のような故郷を目にした。

クロアチア人が逃げ出し、爆撃にやられなかった家の大半はセルビア系住民に

ブコバルも国際的な注目を集めたとはいえ、存亡の危機に立たされている。この町のクロアチア系元住民は1600人しか帰還していない。報復を恐れるセルビア系住民たちは、引き続き脱出をこころみている。いくつかの建物が復旧されたのは象徴的だが、町には愚かな戦争のなごりがみられる。工場、家屋、商店は洗いや略奪されたままだし、失業率は90%ちかい。交通信号は再び点灯しはじめたが、空っぽの道路や建物をあざ笑っているようだ。

1998年に国連の統治下からクロアチアの主権に完全復帰した東スラボニア地方でも、人口は戦前の半分以下にとどまっている。

難民帰還の早期化を求める激しい国際的圧力を受け、クロアチア政府は1998年6月、「全国帰還計画」を採択した。これで(少なくとも原則的には)民族にかかわらず誰もが最低限の書類手続きでクロアチアに帰れるようになるはずだ。帰還民が財産を取り戻すのを困難もしくは不可能にしていた、戦時中の法律も廃止された。

帰郷

計画が採択されてから半年たった今、帰還民は微増したにすぎない。クロアチアの政治状況は流動的で、次回の総選挙は国家の不安ムードをあおるだろう。政府上層部にはセルビア系住民の帰還を望まない人も多く、これまでに帰還したのは、未来の長くない老人が中心だ。

クロアチアの経済状況は、ユーゴスラビアよりまじだが、抜群にいいわけではない。セルビア系の若者たちは、政治だけでなく、就職・就学でも差別が続いていると考えて、帰還には及び腰だ。政府は約25億ドル相当を、今後5年間の再建計画にあてたが、現実に必要なのは250億ドルとみる向きもある。

海外の抛出国は、これまでのクロアチア

「春には帰還も
上向くだろう。」



欧州連合(EU)が資金援助した再建プロジェクト(ブコバル)。

政府の対応を不十分とみて、多額の援助には慎重だ。1998年12月に首都ザグレブで開かれた再建と開発に関する国際会議も、クロアチアの困窮に注目を集めたものの、政府が求めた援助にはほとんど結びつかなかった。「最悪のシナリオは、帰還した大勢の人々が、まだ問題が多いからとユーゴスラビアに戻ろうとすることだ」と、あるUNHCRフィールド職員は言った。

UNHCRは、大部分の地域への支出を減らしているが、クロアチア向けの1999年度予算は昨年度と同じ1300万ドルを確保した。計画担当官のイアン・ホールによると、UNHCRの計画は今後短期的に、「帰還民の家まで同行し、住居修復が進んでいない地域では、そこで家の小規模な修理などを支援する活動」に重点をおくという。「一人あたりの援助額は減りますが、恩恵を受ける人は増えるでしょう」。全体としては、迅速な定着を目標に、村落ベースで対応していく戦略だ。

しかしどんな手段を講じても、今年はクロアチアにとって困難な年になりそうだ。最高のシナリオは3万人の帰還。だがその目標が達成できたとしても、1999年に故郷に帰れる人は、クロアチア難民全体の10%にも満たないのである。■



セルビア系難民女性と、帰還して直面する問題を話し合うUNHCRの帰還担当官(オシエク)

ヨーロッパの 忘れられた難民たち

皮肉にも、忘れられていた難民55万人の苦難に、コソボ紛争の報道によって注目が集まった。

ポーラ・ゲディニ

ユーゴスラビア連邦(新ユーゴ)は、50万人以上の難民をかかえるヨーロッパ最大の難民集中地帯だ。おびただし数の人々が、学校の教室やバラック小屋、工場だった場所に住んでいる。家族全員が小さな部屋に身を寄せあって7年もたつ人もいる。これまでに帰還したのは数千人にすぎず、多くの人々が、もう帰還の日は来ないかもしれないと考えはじめている。

新ユーゴにいるこうした難民の苦境は、何年ものあいだの世界からほとんど無視されてきた。しかし皮肉にも、1998年に世界のテレビで同国コソボ自治州の紛争が報じられると、忘れられた難民たちの未来に大きな注目が集まりはじめた。



1995年、クロアチア軍の猛攻撃を受け、クライナ地方に住んでいた多数のセルビア系住民がセルビアに逃げ込んだ。

1991年にユーゴスラビア社会主義連邦共和国(旧ユーゴ)が崩壊し、まずクロアチアで、翌年ボスニア・ヘルツェゴビナで戦闘がおきると、数十万人が四方八方へと逃れたが、民族的にセルビア系の住民の多くは、セルビア共和国とモンテネグロ共和国からなる新ユーゴに逃れてきた。95年、クライナのクライナ地方は「嵐作戦」と呼ばれるクロアチア軍の猛攻撃を受け、セルビア系住民17万人が脱出。徒歩、車、荷馬車、トラクターでセルビアのベオグラードをめざした。

すでにこのとき、新ユーゴはヨーロッパどころか世界でも最大数の難民を庇護していた。しかし旧ユーゴ紛争の首謀者と考えられているミロシェビッチ大統領が指導者の新ユーゴには、ボスニアなどくらべて国際的援助が集まらなかった。コソボ紛争が起きると状況はさらに悪化し、新ユーゴ政府の対応を批判する新たな経済制裁が実施された。しかも旧ユーゴから独立した各国政府は、いずれも難民の帰還を支援すると口では約束したのに、現実には大規模な帰還を阻止してきた。

頼れる相手がどこにもいない

こうした状況下で、新ユーゴにいる難民55万人はほとんど忘れ去られていた。彼らが帰還を許されるのか、帰還できないなら現在の場所で生活を再建できるのか、それとも第三国で新たな未来を求め



るべきなのかは不透明なままだ。

UNHCRは1991年以来、2億5000万ドルを援助してきた。まずは新しい難民たちの緊急支援に、次に彼らの将来を(それがどんなものであろうと)支援するための一連の計画に。

98年、UNHCRは直接または協力機関を通じて51万人以上を支援した。また98~99年には800万ドルを収入創出プロジェクトに投じ、難民たちが

により対応が遅れているのは、帰還の権利の問題だ。

新ユーゴで美容院やレストランを開業したり、協同養蜂場や協同農場を開くのを支援した。99年は難民約2500人を対象に、住宅480戸分の建築または資金調達を助ける計画を続ける予定だ。住宅の3分の2は、UNHCRと地元自治体が材料と技術支援を担当し、建築は難民自身がするという自給自足と共同体精神の両方を養う自助プロジェクトになっている。

UNHCRはまた、新ユーゴ全土にある544の集合センターで暮らす4万人のために、従来の乾物食糧だけでなく、冬には5年連続で新鮮な果物、野菜、暖房用燃料、高タンパク食品などを支給してきた。教育、



クラグイエパッチ集合センター（セルビア）に暮らすクライナ地方出身の難民たち。

UNHCR / A. KAZINERAKIS

保健、社会プロジェクトの実施や子どもたちのレクリエーション活動もしている。

しかし大部分の難民にとって、未来は希望にあふれているわけではない。97年にセルビアが新しい市民権法を導入すると、

10万人が申請し、4万2000人に市民権と永住権が認められた（拒絶された人はゼロ）。UNHCRの公式計画のもと、昨年6000人以上がアメリカ、カナダ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国に再定住した。今年

も同規模の移住が予想されているが、希望者の数が受け入れ可能数をはるかにしのいでいるのが現状だ。

しかし何より思うように進んでいないのは、帰還の権利の問題だ。これまでクロアチアに帰還した人は3000人、ボスニアには1000人しかいない。

UNHCRは98年末までに、クロアチア避難民・難民局(ODPR)に1万4000件の申請を行ない、99年前半にはさらに8000件を申請する計画だ。またUNHCRとセルビア難民弁務官(SCR)が、共同で全国的な自発的帰還情報キャンペーンを実施。UNHCRのフィールド職員がクロアチアから簡単な状況説明もした。

こうした活動を受け、クライナ地方出身のカラン一家は、故郷に帰ることにした。「もちろん身の安全は心配です」と父親は言う。「でも帰る必要があるのです」。ニューヨークにいる難民の大部分もおそらく同じ気持ちだが、彼らの夢を実現できるかはきわめて怪しい状況だ。■

開かれたとびら

小国モンテネグロは、難民を暖かく受け入れていた。

クロアチア中南部、ボスニアとの国境沿いにあるクライナ地方は、セルビア系住民が多数を占めていた。1995年にクロアチア軍が同地方を攻撃したとき、ヨバンとミリツァ・ヨイノビッチらセルビア系住民は故郷を脱出した。

「何日かしたら帰れると思っていました」とヨバンは言う。ところが彼らはこの3年半、モンテネグロのグシニエという町にあるホテルの一室で、難民として暮らしてきた。「この部屋をみてください」と、ミリツァはむせび泣いた。「食事もここ、眠るのもここ、持ち物もみなここにあります。

こんなの家ではありません。帰らなくてはいいけません」。

年老いたヨイノビッチ夫妻は、故郷グラツァツツ村の家がわずかな傷しか受けておらず、空き家だと知ると、正式に帰還許可を申請した。

モンテネグロは、セルビアとともにユーゴスラビア連邦共和国を構成する、ビーチとスキーリゾートで有名なアドリア海沿岸の小国だ。面積は1万4000平方キロで、人口構成はモンテネグロ人、セルビア系、ムスリム人、アルバニア系など63万5000人。

その国土と人口の少なさを考えると驚くべきことだが、モンテネグロはクロアチアとボスニア出身の難民、そしてコソボ出身の国内避難民推定8万5000人を庇護している。人口に対する避難民の数が、世界でもっとも多い国のひとつだ。

難民とコソボ出身者に無条件の入国を認めているだけでなく、モンテネグロはホテルや病院を避難民に開放している。このため、この国には数年間滞在する人もいれば、数日だけの人もいる。

おそらく今後も、コソボ情勢がモンテネグロの人道措置を決める決定的要因となるだろう。UNHCRは1991年以来、首都ポドゴリツァやウルチニ、ロザイエといった町に事務所を置き難民援助をしてきたが、国際社会がこの地方に関心をもつようになったのは、多数のコソボ住民が戦闘を逃れて来るようになってからだ。

難民生活の長い人々のなかには、当惑して怒りを示す人もいるが、コソボ住民が帰ってしまったら、逆に「世界はまたわれわれを忘れてしまうのだろうか?」と思うかもしれない。■



ラチャク村を逃れる村人たち(1999年初め)

コソボ日記

ユーゴスラビア連邦のミロシェビッチ大統領が、人道機関にコソボ自治州の戦災者との自由な接触を認めた直後、フェルナンド・デル・ムンドが UNHCR 職員としてコソボ入りした。以下は、彼の日記(1998年8月～99年1月末)の抜粋である。

8月16日：緊急物資をデカネの避難民100人に届けようとしたが、われわれが到着した時に彼らの姿はなかった。首都プリシュティナに戻る途中、ピストリツァ川沿いに100～200人の集団が見えた。地元援助職員によると、この地域には1万人の避難民がいるという。まだ夏で果物や野菜は十分あったが、腐った作物や機関銃で殺された家畜の死骸、破壊された住居などあらゆる場所で戦争の兆しが見られた。

8月18日：コソボ中部の2万人に援助物資を届けようとすると、コソボ解放軍

(KLA)の司令官が、UNHCR職員はスパイだと非難した。地元の医師は毎日100人を診療する。その90%は子どもで、下痢を訴える膨らんだ腹部をみると、アフリカの栄養失調児たちを思い出す。

8月25日：UNHCRの緊急物資を積んだトラック7台が爆破され、マザー・テレサ協会の職員3人が死亡した。バガルサを通過中、5週間前に森で産まれたという赤ん坊を抱いた女性が近づいてきた。生き別れになった二人の子どもを捜しているという。

8月29日：同僚二人と、前日攻撃されたシェニクへ。家々はまだ煙がくすぶり、食糧と日用品を満載したトラックが燃えている。死者は、17人以上。雨のなか死者を埋葬していた村人たちは、狙撃兵が銃撃してこないよう、われわれにとどまってほしいと頼んだ。犠牲者のなかには、母親がケガをしたため餓死した生後2週間の赤ん坊もいた。

9月1日：オラホバツは7月に陥落した。しかし政府は、森から避難民3万人が戻り、商店も再開したという。人々が不安のなか帰還しはじめた最初の兆候だ。

9月4日：昨日まで5000人がいたセドラレの丘は、今日のはもぬけの殻。夏じゅうこの調子だ。人々は村から村へ動きつづけている。後を追うだけでも大変だ。

9月9日：数千人がペチ地方に逃げてきた。自動車、荷車、トラックに詰めこまれた人を数えようとしたが、3キロ歩いてあきらめた。ひとりの老人が近寄ってき

た。「頼むから集中砲撃をやめさせてくれ」。私たちが立ち去るとき、兵士や戦車が数キロ先に集まっていた。翌日また出向くと人影がまるでなくなっていた。

9月11日：バラネの町で家屋が燃えている。車で通りかかると、警官が家々から出てきた。テレビを運んでいる警官も。さらに行くと、チェロペクとコストラディッチの村が攻撃を受けて空っぽになっていた。

9月19日：4日間の政府側攻撃に巻きこまれたプリシュティナ北部の村々に、4度目の正直でたどり着いた。ドブラチン村では70戸のうち30戸が燃えていた。村人は落ち着いていたが、翌日は動揺し切っていた。離れ屋で黒焦げの3死体が見つかったのだ。

9月21日：コソボ解放軍(KLA)の兵士が、プリシュティナの北西部にあるコカ川山村から老人や子どもを助けてきた。ある70歳の男性は家族8人をさがして5日間森をさまよった。別の老人も泣き出しそうだ。ドイツにいる兄からの送金で買った6か月分の小麦が、兵士たちに焼かれてしまったのだ。

9月25日：ユーゴ連邦軍の攻撃はピークに達した。コソボ中部の村々では家が焼かれている。途中、「コソボ・メトヒヤ社会人道援助」と書かれた政府のトラックの一団とすれちがった。風で防水カバーがめくれ、荷台いっぱい青い制服の警官が見えた。

9月26日：緒方貞子高等弁務官がプリシュティナの北25キロにあるレシュニクを訪問。避難民2万5000人の一部と言葉を交わした。弁務官が泥道を歩いていると、毛糸の帽子をかぶった老人がぶつくさ言った。「国民をこんな目に遭わせるなんて、ミロシェビッチめ、恥を知れ。」

9月30日：車が地雷を踏んで死傷した赤十字職員3人が、ゴルニエ・オプリニエ村の丘で横たわっている。人々がユーゴのヘリに知らせようと、赤十字の旗を振る。同僚がつけた車のヘッドライトに、やっと気がついたが遅かった。医師の一人が、ほんの少し前に息絶えた。



キスナレナ郊外で野宿するコソボ住民たち(1998年)

UNHCR / B. LEMOYNE

10月27日：欧州安全保障機構(OSCE)の監視団2000人の監視を受けるという停戦合意を受け、セルビア部隊がコソボから撤退している。人々は数か月ぶりに自宅に帰り、親戚どうし涙にむせびながら抱き合っている。解放されたコソボの首都となる予定のマリセボでは、ユーゴ政府軍が数キロ先の駐屯地から撤退するなか、ゲリラ軍司令官が報道陣のインタビューに応じている。

11月3日：山頂が雪で覆われるにしたがい、野宿していた避難民約5万人の最後の一団が故郷に帰った。しかし多くの者が破壊された自宅を見て、20万人がコソボ地方内で避難生活を続けている。

11月9日：戦争は決して遠ざからない。スバレカ地区オプテルサにいた数百人の帰還民が、再び避難をはじめた。3日後には、KLAの兵士5人が近隣の茂みで殺害された。

11月19日：ベリカホチャはセルビア人の多い村で、地元セルビア人は親指を立てたり、Vサインをして挑戦的だ。コーヒーと地元のブランドーを飲んでいたある夫婦は、アルバニア系住民が発砲してきたが、大きな対立はなかったという。妻は、

村には13の教会があって神が守ってくれているから、これまでも助かってきたと話す。

12月4日：ロジャ村は、戦闘機や爆撃、砲撃で破壊され、残った家は二軒だけ。村の入り口には、「ロジャはもはや存在しない」という意味のセルビア語の殴り書きがされている。

12月14日：10月の停戦に反して、暴力の兆しが高まっている。覆面した男たちが、ベチのカフェで銃を乱射、ピリヤードをしていたセルビア人少年6人を殺した。境界線沿いでは、兵士が武装アルバニア系住民の侵入者34人を殺した。

1月16日：セルビア人の一斉攻撃のとき、ラチャク村で45

人が虐殺された。KLAが攻撃の口火を切り、警官が襲われ、兵士8人とセルビア人5人が誘拐された。3万人以上のアルバニア系住民が、ふたたび避難しはじめた。政治的解決の糸口はなく、ふたたびNATO空爆の可能性が出てきた。

1月21日：戦闘は再開されたが、一部地域は安定している。マリセボは7月に空っぽにされ、住民3000人は大勢の治安部隊がいるため帰郷を恐れていた。しかし国際監視団が配備されると半分以上がもどってきた。ラマダン・モズレキーもその一人。彼は自分がラッキーだという。45人の大家族(子どもは25人)の誰一人、戦闘中にケガをしなかったからだ。

1月28日：政府軍による新たな攻撃のなか、ベリカレカ谷のぬかるんだ雪道を進んでいると、銃声や砲撃弾の音が聞こえた。KLAの司令官が言った。「われわれは支配地域を1ミリだって譲らない」。近くのブラダス村の男たちは、コソボではどの村も住民の20%が外国に逃げ出したという。もっと多くの人々が脱出を考えている。「NATOが行動を起こすまでに、一体あと何人が死ななければならないんだ?」とある老人は迫った。■

クリントン米大統領は、コンボ紛争を逃れてきた難民援助のために2500万ドルの追加支出を承認。

米国難民委員会によると、15年間におよぶスーダン内戦の死者は約200万人にのぼる。

庇護を求めて

カザフスタン

難民条約加入

カザフスタンは、1951年難民条約と1967年の同議定書に加入。タジキスタン、キルギスタン、トルクメニスタンにつづき中央アジアでは4か国目となった。

91年に独立して以来、カザフスタンでは政治・環境による災害を逃れて、おびたしい数の人々が国内で避難。現在、国内にいる難民と庇護希望者は計1万4000人にのぼる。

エチオピア

ソマリア人がオガデン地方に避難

昨年末、ソマリア人数千人が国境を越えてエチオピアのオガデン地方に流入。1993～94年の内戦と飢饉以来、エチオピアへの大規模なソマリア人の流入は初めて。しかしエチオピア当局は、難民は干ばつを逃れてきたのであり、部族紛争が原因ではないとの見解をとっている。

アメリカ

支援の手を広げて

現在アメリカで市民権の取得を待つ人は約200万人(一部はもと難民)。米連邦政府は帰化手続きの迅速化をめざして、移民帰化局職員300人を追加雇用し、市民権取得希望者を支援する全国ネットのホットラインをもうけると発表した。

クリントン大統領も年頭の一一般教書演説で、今年度予算案は、審査待ちの人を減らす努力を「大幅に拡大」と述べた。移民局職員によると、この措置で通常2年間の手続きが半分に縮まる見込みだ。

アンゴラ

再び戦争が

明るい未来が待っている、との期待はわずか1年前のこと。アンゴラ政府と反政府組織のアンゴラ全面独立民族同盟(UNITA)は、1994年に和平協定に調印した。国連は国内の安定化支援に15億ドルを投じ、徐々に活動を縮小していた。

ところが再び衝突がおきて、99年初めまでに紛争は急拡大。コフィ・アナン国連事務総長は「意義ある国連の平和維持活動の条件は失われてきた……両当事者と指導者たちは、国民の被害について完全かつ直接的な責任をとらなくてはならない」と声明。UNHCRも、おびたしい数の人々を援助するため昨年夏まで9つのフィールド事務所をもっていたが、首都ルアンダに職員を引き上げさせた。



アンゴラの首都ルアンダに食糧を運んできた国連輸送機。同型の2機が1998年と99年に撃墜された。

前回の戦闘では約100万人が避難したが、昨年はさらに55万人が故郷を脱出。隣国ザンビアに到着した難民によると、軍も反政府組織も、20年以上にわたり若者を誘拐して兵士にしてきたという。国連はアンゴラ関連活動で職員60人の命を失った。そのなかには12月と1月に撃墜された2台のチャーター機に乗っていた職員が含まれる。■

フランス

難民の旅を体験

舞台はパリ中心のバルク・ドラ・ビレット。しかしその風景は、世界中の難民にはおなじみだ。1500平方メートルのテントのなかで、人々は硬いベンチに座り、手には入国申請書をたくさん握って、イライラしながら冷たい役人との面接の順番を待っている。

この「難民」たちは、実際にはUNHCRといくつかの非政府組織(NGO)

が企画した世界人権宣言50周年記念の展示会に来た人々だ。「難民の旅を体験しよう」は、6ドル相当を支払えば、迫害から逃れて安全な避難所を求めるクルド・イラクケリラ、旧ザイール出身の反政府追放者など12人の難民のどれかに扮して、その生活を体験できるというもの。企画者の一人、ペドロ・ピアンナは、ブラ



ジルとチリでの迫害を逃れてフランスに来た。寸劇に登場する「政府当局者」の何人かは、難民が演じている。

「難民の旅を体験しよう」に挑戦した人は推定6000人。その多くは、本当の難民の道を完全にたどるのは耐えられそうにない、と感想をもらした。■

カナダとアメリカは、密入国者に対する初の大規模な二国間作戦を終了。過去2年間で、中国人不法入国者3600人以上を移送した。

アメリカは過去2年間に不法移民30万人を追放。その前の2年間と比べて2倍の数。

スイスでは昨年の庇護申請件数が前年比72%増の4万1300件に。ユーゴスラビア出身者の大幅増が主な原因。

アメリカは、ハリケーン・ミッチで最大の被害を受けた中米諸国からの不法移民を追放しないことで合意。1年半の猶予期間を与えることに。

ジュネーブ

庇護申請が急増中

1998年のヨーロッパ24か国における庇護申請件数は、36万6180件にのぼり、前年比27%増となった。これは主として、コンゴ紛争を逃れてきた人々

の増加が原因だ。36万件の3分の2は、ドイツ、イギリス、オランダ、スウェーデンの4か国で受け付けられた。対人口比で最多の申請を受理したトップ5か国は、

スイス、ルクセンブルグ、オランダ、ベルギー、ノルウェー。庇護を求めたユーゴスラビア人(主にアルバニア系コソボ人)は約10万人に達した。■

中央アフリカ

タンザニア：ふたたび避難地帯に

1998年初めのアフリカ中部地域は、またも混乱をきわめた。政府軍、反政府勢力、地元のマイマイ・ゲリラの三つどもえの紛争がおきているコンゴ民主共和国の東部地域では、市民が隣国タンザニアに避難。大虐殺を恐れ、毎日1000人以上が10ドルで片道切符を手に入れ、壊れかけた漁船に乗って脱出している。その大部分はタンザニアのキゴマをめざす。UNHCRは難民を東にさらに90キロほどのルグワ・キャンプに移送。1月までに3万人が到着した。

タンザニアは現在、35万8000人の難民を庇護している。ブルンジから28万人、コンゴ民主共和国から6万5000人、ルワンダから1万3000人。コンゴ民主共和国の西隣、コンゴ共和国でも新



コンゴ民主共和国での戦闘を逃れて、船でタンザニアに着いた人々。

たな問題がおきている。政府軍の兵士と「ニンジャ」と呼ばれる民兵が首都周辺で衝突しているのだ。少なくとも4万人が避難したが、うち半分はコンゴ民主共和国からの難民だ。UNHCRはこの地域に最低限必要な職員を置いている。■

カンボジア

新たなスタート

彼らは何十年もクメールルージュ(ポル・ポト派)の支配下で暮らしてきた。しかし今年初め、数千人のカンボジア人がブノイ難民キャンプ(タイ)を出て、カンボジア国内の好きな場

所に定住するというUNHCRの提案を受け入れた。

1975年以来、事実上クメールルージュの支配下で暮らしてきた難民たちは、信用ならない体制から初めて解放されて、今後

は新たなスタートのチャンスを得るだろう。またUNHCRは、最近数名が負傷したカンボジア西部で、地雷が依然として帰還民の危険になっている実情を報告した。■

庇護を求めて

シエラレオネ 戦闘はつづく

戦闘がつづくシエラレオネでは、今年初め、反体制派と西アフリカ諸国経済共同体(ECOWAS)の平和維持軍(ECOMOG)が首都フリータウンの支配権をめぐる衝突。すでに50万人ちかくが国外へ逃れ、数千人が避難を余儀なくされた。

緒方貞子高等弁務官は指導者たちに宛てた書簡で、事態が悪化して、反体制派による拷問や手足切断が表面化した昨年の繰り返しとなりうると警告した。

グルジア 新たな措置へ

国連安全保障理事会は、グルジアにおける国連の平和維持任務を6か月間延長し、7月末までとした。また、グルジアから離脱したアブハジア地方の政治情勢について、包括的解決を満場一致で勧告。1992年の内戦発生以来、グルジア人約30万人がアブハジア地方を恐れ、死者も1万人にのぼる。

UNHCR 新年度予算

難民や避難民推定2200万人を援助するため、UNHCRが1999年に必要とする資金は約9億1500万ドル。「難民ひとりあたり1日11セント前後で……世界のもっとも弱い立場におかれている人々の暮らしを大きく変えられる」と、緒方貞子高等弁務官は360ページにおよぶ「グローバル・アピール」の前書きで訴えた。

資金は、難民のいる場所だけでなく、戦争で荒廃した地域に帰還する人々の支援にも使われる予定だ。

「なぜ私だけが助かったのか？」

バンサン・コシェテルが拷問と忍耐の日々を語る。

レイ・ウィルキンソン

キャリアという点では、フランス人のバンサン・コシェテル(37歳)には素晴らしいチャンスだった。カフカス北部地域のUNHCR現地事務所長として、コシェテルはチェチェン、オセチアおよびイングーシの対立で避難を強いられた無数の人々の援助につとめ、仕事を愛していた。

「人とアイデアと任務が魅力的に混ざり合っていました」と彼は語る。「午前中に大統領と会って戦略を話し合った数時間後には、困窮した家族を助けるために泥のなかを歩き回っているという具合です。」

妻と二人の娘と離れて暮らすのは初めてで、それだけは辛かった。しかし彼は、8歳のときフランコ政権下で投獄されたスペイン人司祭の解放のため断食して以来、踏みにじられた人々のために「戦う活動家」として生きてきた。

銃をもった男たちがきた

コシェテルが赴任したときのカフカス地方は、すでに危険な場所だった。UNHCRは武装警備員と装甲車を利用し、彼と同僚たちも日常業務では迷彩車を使って、誘拐犯や殺し屋の目をあざむくため毎日必ず違うルートをとっていた。

1998年1月29日夜10時。コシェテルが、ウラジオカフカスにあるソ連時代に建てられた壊れかけた高層ビルの7階にあるアパートを開けると、銃をもった男3人(それぞれピストルを2丁もち、帽子で顔をすっぽり覆っていた)が暗闇のなかから飛び出してきた。

コシェテルは、狭い台所の床にひざまづくよう命じられ、首には銃を突きつけられ

た。「きっと撃たれると思いました」と回想する。

しかし、コシェテルは予想に反して処刑されず、その後317日間、ぞっとするような環境のなかでとらわれの身となった。

車のトランクに3日間押し込められ、毎日のように繰り返し殴られ、手錠をかけられ、処刑まがいの仕打ちを何度も受けた。逃亡も試みたが、あと少しというところで連れ戻され、以後9か月間地下倉に入れられた。317日間で太陽の光をみたのは1度だけだ。

食事はたいてい薄いおかゆで、時々ジャガイモかニンジンか玉ねぎが入っているだけ。骨付きのトリ肉が与えられた翌日に、その骨を与えられたこともある。誘拐犯の

「きっと撃たれると
思いました。」

一味は「お前は人質だ」といい、150万～600万ドルの身の代金がかけられていると語った。

車のトランクに入れられて

最初の頃は、もうこれで終わりだ、といつも思っていた。3日間、車のトランクに押し込まれた時は、「深呼吸をして、パニックを起こさず、寒さから身を守ることに集中しました。」あるとき彼が、零下の寒さで凍死しそうだと不満を言うと、誘拐犯たちは車のエンジンをかけはじめた。その親切心が裏目に出て、排気ガスで窒息死しそう

になり、やっとエンジンがとめられたこともあった。

誘拐犯はコシェテルを連れて、北オセチアから隣のチェチェンに移動した。チェチェンでのひと月目、彼は少なくとも1時間ずつ、毎日10回は尋問された。そして10か月間、ジメジメした暗い地下倉庫のなかで、鉄製のベッドに手錠と1メートルの鎖でつながれた。歩けるのはきっちり4歩だけ。「いつももう1歩、つまり5歩、歩ける夢を見ました」と語る。

彼は一日2回、1時間半ずつ運動をすることにした。同じ場所を走り、腕立て伏せをし、腹筋運動をした。グルジアパンをひとつかたまり与えられていたが、それは運動した後だけ「自分へのご褒美に」食べた。暗闇のなかでも、1日が「スタートした」と自分に言い聞かせるため、「毎朝」慎重にめがねをかけるなど日課をつくった(本当に朝なのか、それとも真夜中なのかは決して分からなかった)。

あとはベッドの上で、足音や、朝には鳥の声、夜にはカエルの鳴き声を聞きながら、何時間もうずくまっていた。

子どもたちが学校へ行く声も聞こえた。その頃が彼にとって一番つらい時期だった。「子どもたちは、私が失ったものすべての象徴であり、現実の世界の象徴でした。ものすごく落ち込みました。」

ほかにもつらい時期があった。あるとき二人の見張りが、自分たちが避難民だったときUNHCRが援助してくれたことに礼を言ってきたのだ。一見やさしい心遣いだったが、コシェテルはひどく落ち込み、人道活動の根本的理由に懐疑的な気分になった。

昨年10月、酒に酔った何人かの若い見



ハンサン・コシテルと妻フロランス（317日ぶりに解放された後の記者会見で）

張りが「処刑ごっこ」をはじめ、コシテルの頭のちかくで銃を発射した。「何度か泣き崩れましたが、彼らの前では決してその素振りを見せませんでした。もう少しで正気を失いそうになったことは何度もありません。」

逃亡の試み

手錠をこじあげようとしたこともある。「映画だったら、あっという間ですが。マツトレスからワイヤーを引き抜き、手錠をあげるのに15日かかりました。それでもまだ監獄からは逃げ出せません。ベッドとつながれた鎖をほどこうとしたこともある。しかしいずれも発見され、ひどく殴られた。」

コシテルは1998年12月12日、激しい銃撃戦のさなかに解放された。手錠と目隠しをされ、約束の場所まで車に乗せられた彼は、車から這い出したが、押し出され（本人は記憶していない）後部車輪ちかくに避難した。「人質はどこだ」「地面だ」というロシア語の叫びが、マシンガン、ピストル、ライフル、手榴弾の爆音、そしてチェチェン語が飛び交うなかで聞こえた。

とうとうコシテルは引きずられ、別の車に押しこまれ、兵士のヘルメットと思われるものの上に投げ込まれた。「そのとき初めて、安全な側にいるのだとわかりました」と彼は言う。誘拐犯やチェチェン兵は、ヘルメットを着用しなかったのだ。彼はロシア特殊部隊に救助された。そのひとりが礼儀たたくこう謝った。「すまない。きみの手錠のカギを持っていないんだ。」

23キロも痩せ、黒いあごひげ（「カレンダーがわりだった」という）をたくわえた彼は、救助隊員たちとウォッカで無事を祝うと、すぐにモスクワに向かい、さらに家族とつかの間の再会をするためジュネーブに迎えられた。

コシテル解放の4日前、4人の外国人人質がチェチェンで無残に殺された。解放されたコシテルが最初に感じたのは、「すまない」という自責の念だった。「なぜ私は生き残り、他の人質はダメだったのか」

と今も問いかける。コシテルはいつも戦ってきた。いつも次の任務や休日にむけて計画をたてていた。しかし「いまは、未来とは1時間先までをいうのだと学びました。彼は本を読んだり、テレビを見たり、友だちと話をしたり、娘を学校に送ったり、雨のなかに立っていると、なんでもないことに大きな喜びを感じている。」

しかし人質時代の悪夢にも悩まされている。地下駐車場には近寄れないし、美味しいワインを取りに地下室にも入れない。体力づくりも別の方法を考える必要があるという。

なにより彼は、世界の注目から逃れたいと考えている。「妻フロランスと娘サラ、サロメと一緒に家庭人にもどって、仕事を再開したい。無名になって、自分の人生を送りたい」とコシテルは言う。■

「何度か泣き崩れましたが
彼らの前では
決してそのそぶりを
見せませんでした。」



COPYRIGHT

一生がかりの功績

元UNHCR職員のアリ・プリッシミが、ギリシアのアテネ・アカデミーから個人に対する最高の栄誉であるシルバーメダルを授与された。彼女は、第二次大戦中のドイツ占領時代から、故郷の町がロスで飢えた子どもたちに食べ物を与えてきた。英語教師としての報酬は食糧でもらい、貧しい人々に分け与えた。その後アメリカで、ギリシアの貧しい村に衣料などを送る支援組織を設立。1955～80年までUNHCRで働き、女性初の上級職に昇進した。引退後は、89年にギリシア難民評議会の設立を支援、総裁に選ばれた。

災害援助に初出勤

ハリケーン・ミッチが中米に大打撃を与えていた頃、遠く離れたニカラグアのウィリウィリ村では、川の水位が25メートルも上昇。村は事実上破壊された。3週間後、UNHCR緊急対応チームの食糧援助コーディネーター、ファビオ・ヴァロリが現地入りして、生存者に住居を提供すべく即効プロジェクト(QIP)を開始。



© UNICEF / A. BALAGUER

ニカラグアの一時避難所に到着した被災者たち。

ファビオは、「この奥地の村人たちも見捨てられていなかったと実感し、実際に避難場所があると安心してもらえた」という。これは、災害時に支援を行なう国連災害評価・協調(UNDAC)チームにUNHCR職員が参加した初のケースだった。国連開発計画(UNDP)は、同様の住居プロジェクトが他の緊急事態でも有効か検討している。

世界ジャンボリー

第19回世界スカウト・ジャンボリーが昨年12月末～今年1月にピカルキン市(チリ)で開催され、160か国のスカウトとガイド3万4000人が参加した。

UNHCRは、スカウト運動世界機関とガールガイド・ガールスカウト世界連盟の両方と合意をむすび、難民を支援する共同プロジェクトを後援している。ジャンボリーでも難民とUNHCRの活動に関するビデオを提供したほか、毎日二つのワークショップを企画。スカウトとガイドたちが典型的な難民に扮する「パッセージ」というシミュレーションゲームも実施した。またアムネスティ・インターナショナルと、難民の権利と人権に関する記者会見や写真展も共催した。



COPYRIGHT

訃報：レオ・チェーン

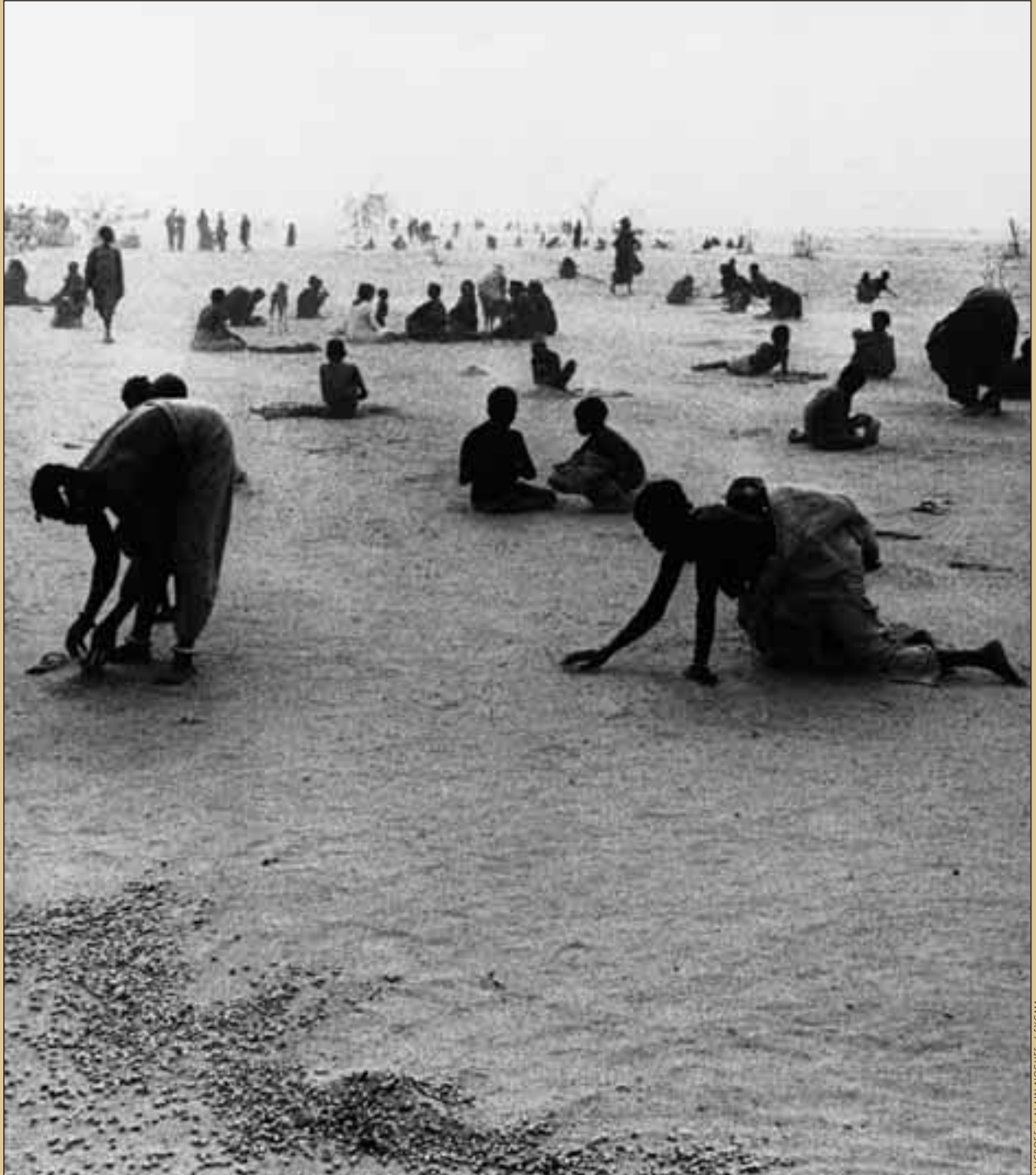
弁護士、経済学者、実業家で、国際救援委員会(IRC)を世界有数の難民援助組織に変えたレオ・チェーン氏が、1999年初めマンハッタンで死去した。86歳だった。同氏は、1951年にIRC総裁に就任。ニューヨークを拠点とするIRCの設立目的は、第二次大戦中にナチ占領下のフランスを逃れてきた数千人の支援だったが、その後、世界中でおびただしい数の人々を助けた。

1984年に全米自由メダルを受賞し、レーガン米元大統領に「人間の自由という大義、とりわけ難民のための活動を通じた倫理的情熱」を称えられた。

ハンガリーの 難民支援活動

UNHCRのハンガリー事務所は、政府の議会オンブズパーソン局に対し、その活動全般と、外国人、庇護希望者、難民のための努力について1998年度メネデク賞を授与した。同賞は、ハンガリーにおける難民と庇護希望者のための顕著な活動を称える目的で95年に創設された。

賞を受け取ったのは議会人権委員会のカタリン・ゴンチェル教授。同教授は、「外国人(とりわけ移動の自由が制限されている人々)の状況を調査し評価するために多大な時間とエネルギーを捧げた」とされる。賞金2500ドルは、オンブズパーソン局の活動促進に使われる予定。



© LICROSS / ALAIN NOGUES / SYGMA

1974年、UNHCRはアフリカ西部のサヘル地方をおそった干ばつの被災者救援に乗り出した。写真はボルタ川上流地帯で、配給後にこぼれた穀物をかき集める女性と子どもたち。

